震災を教訓に何を学ぶか・・・・②

「東北関東大震災の支援活動から、愛南町の防災を考える」

御荘文化センターで、なんぐん地域ケア研究会・愛南町地域保健対策協議会（伊藤孝徳（たかのり）会長）主催による「東北関東大震災の支援活動から、愛南町の防災を考える」が開催され、医療・福祉関係者など約150名が参加し、支援活動についての情報交換や愛南町の防災について討議しました。

まず、防災の視点から緊急消防援助隊愛媛県隊の活動報告が行われ、続いて医療・福祉の視点から被災地支援活動に加わった支援団の活動報告が行われました。

「今後の愛南町の防災」と題したシンポジウムでは、愛南町における今回の津波警報に対する避難行動の状況から、今までの防災意識に対する反省点が指摘され、震災直後の救急医療の問題、避難場所・地域におけるリーダーシップがきわめて重要であること、福祉施設自体が通常の避難所になることが必要ではないか、などの問題提起がなされました。

仙台市内の福祉施設の状況(抜粋)

- 建物の倒壊等のダメージはほぼないが、ライフラインの復旧が遅れている。
- ガソリンが無いため、デイサービス利用者等の在宅利用者支援が行えない。
- 利用者に死者が出た事業所では、家族からのクレームも出てきている。
- 災害発生から一週間が経過し、スタッフの体力・精神的な疲れもピーク。
- スタッフも被災者であり、人員不足が出ている。法人内のスタッフで協力して現場をまわしているが限界。

石巻地域の避難所の状況(抜粋)

- 精神障害の方もおられ、眠れない方に睡眠剤を処方していた。薬の飲み方まではサポートできず、一度にすべて服薬しフラフラの状態になっていた。
- 知的障害の方も避難していたが、スタッフはおらず周辺の方がサポートしている状況。
- 看護スタッフがとにかく手薄。

緊急防災キャラバン「東日本大震災・我々は何ができ何を学ぶのか」

ホテルサンパールで、近い将来発生が予想されている南海地震への備えを考えようと、「緊急防災キャラバン―東日本大震災・我々は何ができ何を学ぶのか―」が行われ、防災関係者など約３３０名が参加しました。

まず、愛大防災情報研究センターの鳥居謙一センター長が、東北地方太平洋沖地震の概要を説明し、過去の災害・想定でイメージを固定化させず、想定を超えた場合のことを考えておく重要性を呼びかけました。

続いて消防本部の若林弘武消防司令補が、緊急消防援助隊の活動について報告、愛大防災情報研究センターの森 伸一郎准教授が、岩手県宮古市などの被害状況調査から、津波被害や液状化現象、原発被害などの実相について発表、四国防災八十八話感想文コンクール最優秀作品の朗読がありました。

最後に、愛大防災情報研究センターの矢田部龍一教授が、「日本は世界有数の自然災害多発地であり、改めて自然に対する謙虚さを持つべき。犠牲者を悼み、被災者の心の痛みを共有することが必要。公的精神を復活し、被災者と一体化して復興にあたるべき」と訴えました。

避難の心得（鳥居センター長の講演より）

(1) 防災無線の放送・消防団の呼びかけを待たずに逃げる。
(2) 逃げるときには「津波が来るぞ」と言いながら逃げる。
(3) 避難する時、決して立ち寄らない、戻らない。
(4) 地域の要援護者を誰が援護するのか予め決めておく。
「誰かが援護しなくてはならないこと」
(5) 子どもが一人で避難できることを確認しておく。
「強い揺れを感じたら高台に逃げてね。家に帰らないでね」
(6) 津波が来なくても人の責任にしない。
(7) 逃げ遅れたら、できるだけ高いビルに逃げる。
諦めない。